



女性が輝く農業ネットワーク

長岡周辺地域女性農業者コミュニティ/nowa



女性農業者同士で悩み相談や情報共有をする仲間がほしいと、同じ想いをもったメンバーで2021年3月に団体を設立。イベントを通して、交流の機会づくりや農業と食に対する理解を深める活動を行っています。農業というと男性中心のイメージがあると思いますが、性別に関わらず平等なリーダーシップを発揮できる環境づくりが重要だと感じているので、これからも私たちが目指す食と農業を広めていきます。



誰もがやりがいを感じられる企業を目指して

株式会社 太陽工機

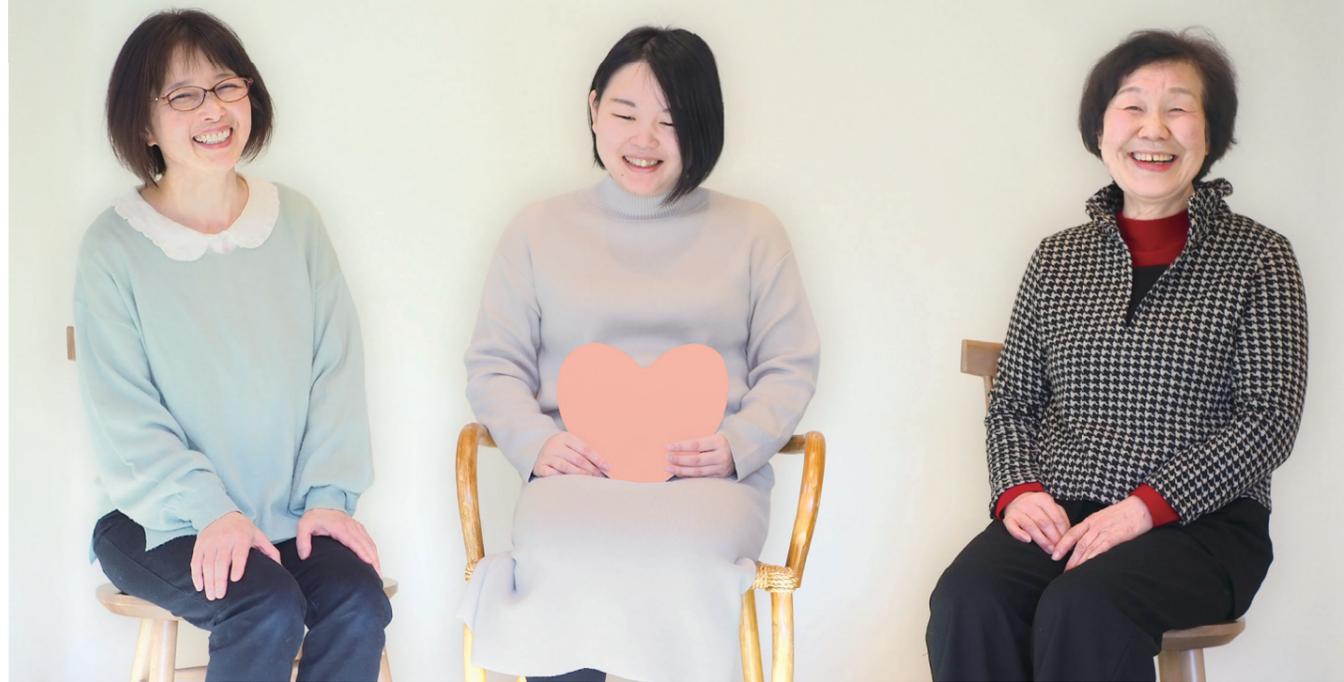


工作機械の一種・研削盤を製造販売するメーカーです。一人ひとりがやりがいを持って働ける職場環境をつくるため、12時間インターバル制度の導入、連続有給休暇取得の奨励などワークライフバランスを推進し、意識や意欲を刺激して会社全体の成長につなげてきました。また、同一労働・同一賃金の推進や、全社員に対する教育機会の提供により、若い世代や女性のエンパワーメントを後押しし、活躍のチャンスを広く提供しています。



ウイルス禍の裏側で

外出自粛にマスク着用、検温、消毒  
ウイルス禍で生まれた新しい「当たり前」は  
私たちに何をもたらしたのでしょうか



特集

子どもみらい食堂/日吉 均子さん  
ひだまりハウス～発達障がい児を支える家族会～/小西 美樹さん  
みんなの認知症予防ゲーム(あおーねの会)/木村 千枝子さん

NAGAOKA PLAYERS  
松田 義太郎さん

長岡みんなのSDGs

長岡周辺地域女性農業者コミュニティ/nowa  
株式会社 太陽工機

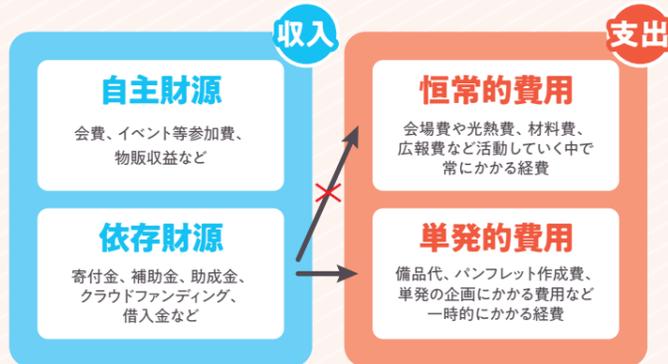
市民活動・虎の巻

会計の基礎 ～次年度計画に向けた資金調達～

市民活動・虎の巻

研究テーマ 会計の基礎 ～次年度計画に向けた資金調達～

1年間の収支がバランスよく終わっても、次年度も同じ計画でいいのか考える必要があります。今月号は次年度に向けた資金調達のポイントをご紹介します。



恒常的費用を依存財源で支払うのは危険!

次年度も得られる保証のない依存財源ではなく、自主財源を恒常的費用に充てる前提で活動計画を考えましょう。また恒常的費用をなるべく抑えられれば、活動を継続していきやすくなります。

収支バランスが良くても気をつけよう!

補助金や期間限定の事業費などをもらっている活動は、依存財源がなくなった場合でも継続できるのか考えておくことが大切。自主財源を確保または拡大できるか考え、難しい場合は事業縮小なども必要になります。また事業スタートを補助金に頼ることで団体の実力以上の事業規模になってしまう危険もあります。予算の規模と労力は比例しますので、自分たちにできる範囲で無理なく続けていける予算計画を立てましょう。

MEMO

市民活動の基本は「できることをできる範囲で」。活動が自分たちにプラスになっているという実感や、無理なく続けられる活動量を大切に次年度計画を考えていきましょう!

センターからのお知らせ

活動をアピールしよう! 団体情報や活動報告を「コライト」に掲載しませんか?

「ホームページを作って活動をアピールしたいけど、作り方がわからない」「ホームページを作っても、ちゃんと管理できるか不安」という方にオススメ! 協働センターのホームページ「コライト」に、団体情報やイベント告知、活動報告などを掲載しませんか? 自分でホームページを作らなくてもOK! 協働センターがインターネットを使った情報発信をお手伝いします。

掲載できるもの

- 団体情報 (団体名、活動目的、活動内容など)
- イベント告知
- 定期的に発行している情報誌
- 活動報告

掲載する方法

- 協働センターに団体登録する。
  - 掲載したいものを、協働センターに持ち込むか、メールか郵便で送る。
- ※イベントのチラシや情報誌、活動報告文など、A3サイズ、10ページまで。

1週間後を目安に内容が掲載されます!

※団体登録の対象になるのは、3名以上の構成員がいる、地域社会や市民のために活動を行うNPO法人および市民活動団体です。営利を目的とするものや、政治・宗教に関わるものは除きます。 ※イベント告知や情報誌、活動報告の掲載は、1つの団体につき月1回まで承ります。



もっと知りたい方は、こちらをご覧ください。

# 「ウイルス禍の裏側で」 感染拡大防止のための制限は私たちに何をもたらしたのか

らこって編集部が長岡市を縦横無尽に駆け回って見つけた、協働や市民活動に関する話題をお届け!

今回のテーマは「ウイルス禍の裏側で」。

感染拡大防止を目的とした制限は、私たちの命を守ってくれている一方、それぞれの世代や立場の人たちに様々な課題を生んでいます。

新型コロナウイルスの流行から、もうすぐ2年が経とうとしています。感染拡大防止を目的とした様々な制限はもはや私たちの日常になり「ニューノーマル」と呼ばれるようになった一方、それぞれの世代や立場の人たちが元々抱えていた課題を浮かび上げさせ、また新たな課題を生んでいます。そうした人々をサポートしている市民活動団体は、ウイルス禍でどのような課題に向き合い、そこからのような気づきを得てきたのでしょうか。今回は、子どもたちや高齢者、発達障がい児やその家族を支える団体の代表、日吉均子さん、木村千枝子さん、小西美樹さんにお話を伺いました。

## 制限下でそれぞれが抱えている課題

——ウイルス禍では人と人の接触を避けるため、外出自粛や学校の休校という対応が取られましたが、高齢者や子どもたちにはどのような影響があったのでしょうか。

**木村さん(以下、木村):**高齢者は人と話したり体を動かしたりする機会が減ったことで、**体力や認知機能の低下**が心配です。外に出ないことで「一日誰とも話していない」という方もいらっしゃいます。

**小西さん(以下、小西):**突然の休校により、子どもたちの預け先がなく仕事を休まざるを得ない状況でした。発達障がいの子どもの中には、生活リズムが崩れたことで**自傷行為**がひどくなる子もいました。

**日吉さん(以下、日吉):**子どもの**学力に差**が出てきているように思います。子どもみらい食堂では、ウイルスの流行が始まった2020年の5月から学習支援を行っています。希望者が多く必要性を感じています。



感染拡大による学校の臨時休校を受けて始まった子どもみらい食堂の学習支援の様子。



**日吉 均子さん**

「子どもみらい食堂」代表。多世代交流の場として子ども食堂を運営しているほか、ボランティアによる子どもたちの学習支援も実施。

**木村 千枝子さん**

「みんなの認知症予防ゲーム(あおねの会)」代表。予防ゲームのプログラムを活用し認知症の予防と正しい知識の啓発を行っている。

**小西 美樹さん**

「ひだまりハウス~発達障がい児を支える家族会~」代表。発達障がい児をもつ家族が困りごとや情報を共有できる茶話会などを実施。

——マスク着用や検温、ソーシャルディスタンスの確保が日常になりましたね。

**小西:**発達障がいの子どもの場合は感覚過敏でマスクを着けられないことが多いので、「マスクつけられません」シールを作りました。しかしマスクを着けていないと入れない場所が多く、気分転換に出かけられる場所がありません。また**非接触型体温計を向けられるのが怖かったり**、人との距離が近くなってしまったりする子もいます。



発達障がいのためマスクを着けられないことを知らせるためのシール。

## 制限が活動に与えた影響

——感染対策を目的とした制限は、子どもや高齢者、発達障がい児やその家族だけではなく、

そうした人々を支える皆さんの活動にも影響があったのではないのでしょうか。

**日吉:**子ども食堂では、会食ができなくなったため、お弁当配布に切り替えました。今まで利用されていなかった方も来ていただけるようになり、利用者の数が2倍になりました。活動に制限がかかっている部分もありますが、**活動を継続するために工夫することでアイデアや活動の幅が広がった**ということもあるかもしれません。

**木村:**私もそう思います。閉じこもらないように参加してほしいと思う一方、外出自粛により



感染予防のため、手袋をして将棋を楽しんでいる脳活性化教室の参加者の方たち。

参加者が一人だったこともありましたが……。しかし基本的な感染対策に加え、ゲームの道具や内容を工夫することで安心して参加していただけるようになりました。**公共施設が閉鎖**されてしまい、開催できないこともあります……。

**小西:**今まで活動していた**場所が使えなくなる**ということはありませんね。以前は子どもたちを連れて茶話会に参加できるように託児サービスを提供していましたが、ウイルス禍で難しくなり**オンラインで開催**するようになりました。インターネット環境のある場所でした活動できず困っています。

## ウイルス禍で気づいた大切なこと

——活動に制限がかかった一方、市民活動の重要性は今まで以上に増したのではないかと思います。

**小西:**発達障がい児の家族が一人で悩みを抱え込まないように、相談者の方が24時間いつでもメッセージを送れるようにしました。**周囲の人の困りごとに柔軟に対応できるのは、市民活動の良さ**だと思います。

**木村:**参加者の中には話す機会が減っている方もいるので、**口腔体操を取り入れました**。会場に来て仲間と出会い、元気になって「また、来たい!」と言っていたかのように、その時々で内容を変更してでも継続してきて良かったと思います。

——ウイルス禍の生活や活動の中で気づいたことはありますか。

**日吉:**人とのつながりの大切さ、そしてそのつながりの中で支援してくださる方の温かさです。子ども食堂では、地域の企業さんだけではなく**日本全国から支援**していただき、学習支援では、学生から大人まで様々なボランティアの方が活動を支えてくれています。

**小西:****人とのつながりがなくなると情報不足になり、活動も縮小**してしまう気がします。人と何気ない話をする時間の大切さを再確認しました。

**木村:**ウイルス禍で人との接触を避けなければいけない状況ではありますが、色々な立場の人とのつながりが大切ですね。

## まとめ

ウイルス禍で様々な世代や立場の人たちが抱えている課題は、他の人の生活を想像する思いやりがなければ見えにくいものなのかもしれません。自分や周りの人たちの健康を守ることはもちろん大切ですが、「これが当たり前」と判断したい気持ちを少しだけ脇によけて、自分の周りにあるたくさんの「当たり前」に耳を傾ける優しさを心の中にもっておいたら、私たちはこの危機の中を、そしてその先を共に生きていくことができるのではないのでしょうか。

ウワサのあの人にインタビュー!

# NAGAOKA PLAYERS

人をつなげるものづくり  
やってみたいから始まる活動



**松田義太郎さん(81歳)**  
自営業

1940年長岡市山古志出身。農業、養鯉業、雪下ろし、手仕事屋など四季に合わせて山古志地域の暮らしを体現している。

80歳を超えた今でも現役で農業、養鯉業、雪下ろしなどをこなす松田義太郎さんは、わら細工でつくる猫ちぐらや鍋敷き、菅笠づくりを教える先生です。そんな松田さんが住民向けの教室を始めたきっかけは約30年前に手がけた公民館活動のパソコン教室でした。当時近隣ではなかった先進的な企画で参加者が殺到。「初めて考えた企画で多くの人を集められたことで、地域で何かやることの手ごたえをつかめた。人がやっていないことを地域で実践することにやりがいを感じました」。

その後もさまざまな企画をしてきた松田さんが感じたのが、高齢者世代の参加が少ないこと。高齢者が家に引きこもらず、ボケ防止にもなる手揉の工作教室を約20年前に開催。作品を診療所に展示してもらったこともあったそうです。「みんなで集まって楽しく手仕事をすることで、人のつながりを生むことができ良かったです」。

手揉教室を通じてものを作る楽しさに目覚めた松田さんは、人が作っていないものを販売したいと70歳を超えて猫ちぐらづくりにチャレンジ。地域で販売し始めたところ、制作したものはその年のうちに完売するほど好評でした。人気の猫ちぐら職人になった松田さんへ2019年におらたるカルチャー教室の講師依頼があり今度は教室の先生に。最初は自分のような職人を育てようと考えていましたが、参加者からは使えるものづくりができれば良いと温度差を感じることもあったそうです。「技術は教えつつ、参加者と一緒にものづくりを楽しむことにシフトチェンジしたことで、自分も楽しく続けられています」。

2022年からはより実用的なものを自分で作る楽しさを伝えようと、鍋敷きや菅笠の教室を開催。「習いたい人がいる限りは続けていきたい。私から習った人が人に教えることで、活動に広がりを持たせることが今後の目標です」。何歳になっても常に新しいことにチャレンジする松田さんの活動が今後も続いていきます。

